

## 山中 浩明 (やまなか ひろあき)

東京工業大学環境・社会理工学院 教授、工学博士



### 【専攻分野】地震工学

### 【本会活動】

論文集編集委員会委員 (2000年5月～2002年5月)

役員候補推薦委員会委員(2006年5月～2008年5月)

理事 (2009年6月～2011年6月)

地盤情報データベースを用いた表層地質が地震動特性に及ぼす影響に関する研究委員会  
委員長 (2010年12月～2012年12月)

大会実行委員会委員長 (2011年), 委員 (2012年)

東日本大震災合同報告書作成委員会地震・地震動編報告書作成委員会委員 (2012年)

2014年長野県北部の地震に関する調査団団長 (2014年11月)

強震動評価のための表層地盤モデル化手法研究委員会委員 (2014年4月～2016年3月)

強震動評価のための深部地盤モデル化手法の検証に関わる研究委員会委員 (2017年3月  
～2019年3月)

第6回 ESG 国際シンポジウム運営委員会委員 (2018～2021)

強震動評価のための深部地盤モデル化手法の最適化に関する研究委員会委員(2019年4月  
～2021年3月)

副会長 (2020年5月～2022年5月)

将来構想委員会委員長 (2020年5月～2022年5月)

### 【略歴】

1983年 早稲田大学理工学部資源工学科卒業

1985年 東京工業大学総合理工学研究科社会開発工学専攻修士課程修了

1989年 東京工業大学総合理工学研究科社会開発工学専攻博士課程修了

1989年 日本学術振興会 特別研究員

1990年 南カリフォルニア大学工学部 研究助手

1991年 鹿島建設株式会社小堀研究室 研究員

1995年 東京工業大学大学院総合理工学研究科環境物理工学専攻 助教授

2011年 東京工業大学大学院総合理工学研究科環境物理工学創造専攻 教授

2016年 東京工業大学環境・社会理工学院建築学系 教授

### 【受賞】

2016年度地震工学会論文賞

2008年度物理探査学会論文賞受賞

2006年度物理探査学会賞受賞

### 【委員会活動(直近5年間)】

- ・地震調査研究推進本部地下構造モデル検討分科会 (平成17年度～)
- ・地震調査研究推進本部強震動評価部会 (平成23年度～)
- ・国際地震工学研修・普及会議 (平成26年～)
- ・瑞穂町新庁舎建設に係るアドバイザー (平成27～30年)
- ・内閣府相模トラフ沿いの巨大地震等による長周期地震動検討会 (平成28年～)
- ・国際地震工学研修カリキュラ部会 (平成28～31年)
- ・建築研究所地震工学分科会兼研修評価委員会 (令和3年～)
- ・ESG5 International Scientific Committee, member (2015～2016)

- ESG6 International Scientific Committee. member (2020~2022)
- 2nd,3rd,4th Asia Pacific Meeting on Near Surface Geoscience & Engineering EAGE (2019~)
- Turkish-Japanese Science and Technology University, STWG1 member (2021~)
- 物理探査学会会長 (平成 28~29 年)
- 日本建築学会代議員 (令和 3~4 年度)
- 日本工学会理事 (令和 3~4 年度)

【著書および主要論文(代表的なもの 10 編以内)】

- 山中浩明, 地元孝輔, 津野靖士, 是永将宏, 三宅弘恵, 吉見雅行, 杉山長志, 先名重樹, 富士川河口断層帯周辺での臨時強震観測と微動探査, 物理探査, 74, 49-56, 2021.
- O. T. Ozmen, H. Yamanaka, E. Ate, K. Tekin, U. Ceken, E. Koparmal, A. Etiz, N. Elmas, Microtremor exploration at strong motion stations in Aydin and Denizli provinces, western Turkey, Exploration Geophysics, 659-668, 2021.
- Miyakoshi, H., S. Tsuno, K. Chimoto and H. Yamanaka : Investigation of site amplification factors for S- and P-waves from spectral inversions in the Tokyo metropolitan area, Japan for application to earthquake early warning, J. Seismology, 23, 561-578, 2019.
- Saifuddin, H. Yamanaka, K. Chimoto, Variability of shallow soil amplification from surface-wave inversion using Markov-chain Monte Carlo method, Soil Dyn Earth. Eng., 107, 141-151, 2018.
- H. Yamanaka, O. T. Ozmen, U. Çeken, M. A. Alkan, M. Tun, and E. Pekkan, Exploration of S-wave velocity profiles at AFAD strong motion stations in Eskisehir, Turkey using microtremor and earthquake records, J. Seismology, 22(5), 1127-1137, 2018.
- O. T. Ozmen, H. Yamanaka, M. A. Alkan, U. Çeken, T. Öztürk and A. Sezen, Microtremor array measurements for shallow S-wave profiles at strong motion stations in Hatay and Kahramanmara provinces, southern Turkey, Bull. Seism Soc. Am., 107, 445-455, 2017.
- H. Yamanaka, K. Chimoto, H. Miyake, S. Tsuno, N. Yamada, Observation of earthquake ground motion due to aftershocks of the 2016 Kumamoto earthquake in damaged areas, Earth, Planets and Space, 68, 197, 2016.
- 津野靖士, 山中浩明, 翠川三郎, 地元孝輔, 宮腰寛之, 佐口浩一郎, 酒井慎一, 三宅弘恵, 瀬瀬一起, 2011 年東北地方太平洋沖地震の東京湾西岸部に於ける周期 2~3 秒の強震動生成要因, 地震工学会論文集, 16-4, 35-51, 2016.
- 地元孝輔, 津野靖士, 山中浩明, 東北地方太平洋沖地震の余震と微動観測記録を用いた茨城県中部における地盤震動特性の評価, 地震工学会論文集, 16-4, 142-154, 2016.
- H. Yamanaka, M. S. Q. Gamero, K. Chimoto, K. Saguchi, D. Calderon, F. Lázares, and Z. A. Bardales, Exploration of deep sedimentary layers in Tacna city, southern Peru, using microtremors and earthquake data for estimation of local amplification, J. Seismology, 20, 107-116, 2016.

【所信】(700~1000 字程度)

この度、役員候補推薦委員会から会長候補者にご推薦を頂きました。誠に名誉なことであり、感謝いたします。地震工学会には、設立時から、研究発表などの場を与えていただき、主に学会のサービスを楽しむ立場でした。今回、微力ながら地震工学会のために貢献したいとの意志を強くし、ご推薦をお引き受けすることにいたしました。

地震工学会は、昨年、設立 20 周年を迎えました。設立時には、私は、地震学と耐震工学の境界の中堅研究者として大いに期待し、その後には広がる地震工学分野の将来を思い浮かべました。それから 20 年、地震工学会は、地震災害に関わる学際的な活動の場を着実に提供し続けています。地震工学会は、関連する学会に比べると、新しい学会になります。そのために、ここ 10 年ぐらいの間に多くの歴史ある学会が対峙してきた学会運営や財政などに関わる数々の問題を抱えずに済んでいます。電子ジャーナル化による冊子の廃止や IT 化による学会運営改革などがいい例です。地震工学会は、ポーンデジタルとしてスタートでき、社会のデジタル指向の高まりとともにスムーズに発展することができました。しかし、世の

中の DX 化のスピードは思いのほか速く、学会サービスのさらなる質的向上が必要であると思います。また、少子高齢化による会員数の減少も避けて通れない問題です。会員数の減少は、学会活動への影響が大きく、何らかの対策を実施しないと学会のサービスの一部を提供できなくなるかもしれません。このように、地震工学会には、今後のさらなる学会運営の改革が求められていると思います。私は、2020 年から地震工学会将来構想委員会およびWGにおいて学会の将来を担う中堅の研究者や技術者の皆さんと一緒に地震工学会の将来の課題について議論してきました。地震工学会が分野横断型の学会としての役割を担っているがゆえに特有な問題が生じている事実も認識させられました。最近の地震災害が複合・複雑化していることを踏まえれば、主要関連 5 学会との連携だけでなく、より幅の広い分野との連携を一層深めることには論を待ちません。さらに、国内のみの活動に留まらず、周辺国、とくに、西太平洋の地震国の地震工学分野との国際連携をより強化することも地震工学会に期待されている重要な任務と思います。

地震災害に関する多様な研究分野のシニア、中堅、若手の研究者、技術者、さらには学生が世代を超えて活発に議論できる場を地震工学会が提供し続け、次の 10 年へ向けて地震工学会の進むべき道筋を確固たるものすることに尽力できる機会を頂ければ幸いです。

以上